

9

渋江家所蔵の史料と鷗外の「渋江抽斎」

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学講座

森鷗外の史伝「渋江抽斎」は文学作品として高い評価を得ているが、医学史研究、特に弘前藩を中心とする幕末の医学史の史料としても極めて重要であると演者は考えている。

抽斎は五世の祖辰盛（初代道陸）以来弘前藩の定府医官として仕えた渋江家の第五代で、名は道純で抽斎は号である。「江戸御家中明細帳」によれば略歴は下記の通りである。

文化11年12月	御目見
文政5年9月	月並出仕
文政5年2月	御番見習
文政5年8月	一粒金丹御伝法
文政12年3月	近習医者介
天保7年3月	近習詰
天保14年6月	近習医者格
天保15年3月	医学館陪臣町医へ講書
弘化4年12月	近習医者
嘉永2年3月	公儀御目見
安政5年8月	病死

抽斎は定（尾島氏，離縁），威能（比良野氏，病死），徳（岡西氏，病死），五百（いお，山内氏）と結婚し，7男7女を儲けたが，多くは早世し，徳との間に儲けた次男優善（後の優）は同藩の医者矢嶋玄碩（矢嶋家第5代）の養子になった。結局抽斎の跡を継いだのは7男の成善，後の保（たもつ）であった。保は医者にならず，翻訳家，著述家として名をなした。鷗外は「渋江抽斎」を執筆するに際して「抽斎年譜」，「渋江家乗」，「抽斎親戚並門人」，「抽斎没後」など殆どの材料を保から得た。「渋江抽斎」の高い評価は偏に保の力によると評される所以である。

保には3男3女の子供がいたが，3女の乙女以外は早世した。1930年（昭和5）乙女は津軽家元御用商人の息佐藤豊松と結婚し翌年現当主豊彦氏が生まれた。代々は抽斎一保一乙女一豊彦となる。

豊松は1934年（昭和9）から青森市浅虫の別荘で暮らしていたが，1938年（昭和13）に仙台に移り宮城県丸森町の台町炭鉱を経営した。しかし戦災で仙台の邸宅は焼失し一切を失ったので，再び浅虫に戻った。抽斎の直系のご子孫が青森におられるのは以上の事情による。

抽斎存命中35000部以上あったといわれる蔵書は，大半を次子優善が持ち出して遊興に費やした。廃藩に伴っての弘前への帰国と再上京時の混乱，仙台での戦災などで鷗外の保宛の書簡など殆どすべての史料を失った。しかし乙女が命に以上に大切にしてきた抽斎自筆の文書が数点保存されている。

「医学館講書一件記録」（24丁），「医学館講書被仰付候節御留守居方留書」（23丁），「渋江族系譜」（20丁），「一粒金丹効能」（文化11年平沼養敬から抽斎の父允成へ伝授され，さらに抽斎に渡された秘伝書），抽斎関係の「切紙」5点である。「医学館講書一件記録」は抽斎が幕府医学館での講書を仰せつかった際の記録であり，当時の講書の実態を物語るこれ以上の史料はないと考えられる。「医学館講書被仰付候節御留守居方留書」は医学館での講書，そしてその後公儀御目見時に藩と対応した記録である。経済的に困窮し藩に10両の借用を申し込んだが，3両しか借りられなかったことなどが記されている。このエピソードは「渋江抽斎」には出てこない。これらの史料を仔細に点検したところ，とくに「医学館講書一件記録」と「医学館講書被仰付候節御留守居方留書」の2点は鷗外が実見していないことが強く示唆されることが判明した。

現在演者が整理中の「渋江家所蔵史料」は抽斎関係史料，保関係史料，乙女関係史料に分けられるが，珍しい抽斎の4番目の妻五百と保の写真なども供覧する。